世事百談

三

イ 5
1636
2

世事百談巻之三目録

米穀ハ國の基
慶安 女術 肝煎
敷島社内
法華經の巻数
いらたかの数珠
氏寺
郭巨が黄金釜
田舎詞 俗語
時の鐘
鬼魘くるかのゝ治療
必死を極めし人蘇生せし話
中人
东百官
草書心經
平形念珠 二連数珠
古画を證とす
源氏物語
有文
熊膽の功能真贋の辨
食せずして飢ざる法

門 イ 號 1636 巻 2
昭和 年 月 日 藤安三郎氏寄贈

唐人ハ浴せざるといふ譌
兄唄験
豊太閤
安藝國可愛川の考
冨士山の高さ
舟幽霊
欺て寃魂を散
曽呂利新左衛門自画賛
おころへいの寝
翁問答

世事百談巻之三

米穀ハ國の基

黄金萬貫不可療飢白玉千箱何能救冷と書紀にもありて食ハ天下の本なれバ上古より祈年祭とて豊年をいのる事行り今も仲春祈年祭義解に云欲令歳災不作時令順度即於神祇官祭之故云祈年といへり安斎筆記に凡生活する物その生命を保つものハ食物なり鳥獣魚蟲に至るまで食物を求るをもつて勤めとす況や人倫をや赤子出産すれバ母の乳味をもとめ生長して四民おのおの其家業を勤るハ食物を求るが為なり食せざれバ生れ得たる寿命を保つことあたハずされバ人倫の至宝ハ五穀なり金銀珠玉を宝

41 9485

とすれバ若その金銀珠玉をもつて五穀を買んと欲すとも凶年饑歳なるひハ乱世ならずとても五穀を売るものゝ無き時にいたりてハ金銀珠玉ハ食れぬものなれバたちまち餓死すべし然れバ五穀ハ至宝なり五穀ハ生なくハ食れぬ物なり五穀を食ども衣服を着されバ凍死す、されバ衣服ハ五穀にひとしき宝ものなり食物と衣服の外ハ有用の宝物にハあらねど亦無用の宝なり、永禄年中の乱世に天子も饑渇におよばせたまひしかバ富有の商家より米を献りて饑をしのがせたまひしよし物に侍べり、上にも申き三種の神器ハ禁中にあれども、天子の御饑を助けまゐらするものにあらねバ彼時にあたりてハ米穀ハ珍宝よりも貴かりしを考べし、世に宝物と称するものハ宝なれども、五穀衣服食物を調ふ器物よりも

劣りたる宝物なり、後代にハ食て生命を保つべき米を売拂ひ、食ハれもせぬ金銀を求むるハ愚なるよし、然バ米をたくはへ、百姓足らバ君たれと足らざらん、百姓足らずんバ君たれと足らんといふがごとく、国家の富饒ハ百姓の次第一なるなれども、其本ハ耕作を力て五穀をつくるよりなすべし、穀ハ米穀の人を養ふ徳のたふときを上にすべし、一騎当千の剣術の達人弓馬の名人なりとも腹の中がひもじいといふ大敵にまけられてハ防ぐも逃れもならざるべし、昔の名将勇士たちの名もなき雑兵の手にかゝりあへなく討れたるも大かたハ数日食事のいとまなく空腹になりたるなり、されを軍書に軍にハ兵糧のいそぎをしるしたるハ、されがひもじくなりしからといふはたとへバ飾り詞といふものなり、

これを孔子の足兵足食民信之と仰られき。また論語に既に
庶ありて富之教之とのたまひしを、ある人庶とハ軍兵の多きを、
富まんとハ兵糧の事、教とハかけ引操練の事なりと解しハ活さびやうなりとぞ

必死を極めし人奇運せし話

元禄の初信濃国下の諏訪なる百姓佐次右衛門の一子佐次郎といふ者盲となりけるが父母身まかりて後その里に住ぐらしけり十四歳のころ伯父の諏訪郡といふ聟者江戸京都の辺に来てのこと学てしかし知りここかしこ尋ねしかど知れざりければいかゞハせんと心を痛めて只日を送りけるその伯父の諏訪郡ハ二十四年以前に江戸へ出でしハ佐次郎が生れぬ前のことなり古郷へハ音信もなく是まで一度も逢ひたることなき父母

子なくより寂しくて暮しけるが縁ある者の語りつたへに諏訪郡が事を少しばかり伝へ聞きけるが江戸に在りける身の上を知まんとおもひしが其の伯父のありかも知る人もなく尋ぬる人のなかりしが細きことしきてそれとかくなし空しく月日を送りしがその名に似たる人ありと聞て佐次郎ハはや十四歳なれば四国三十三所の順礼に出でんと江戸の事ひろきを尋ぬべき便りもなし唯其の辺りのことをきゝて登りしも知れば江戸の中なくなるびろうずまゐらせんとものゝ尋ねもやこの上ハ尋ぬべき便りもなしとなげきかなしみ盲人のことなれば今は尋ねえずとおもひんとせしかなしさをいひしらず便宜もかなり旅せぬこのともしきなき身のこと問ひたまへば道に知るべきよすがも無くして佐次郎が古郷を立出しその始めハ父母の教へ人の縁絶し事縁の人

の才まで手とよせくありしがなかにこの家も窮しくなりぬれバなかくハ親ぐかゝく
大かたなんでさまざま伯父を頼りまゐらせつゝ後見をまで江戸に来りてやゝ日
数をへぬるほどに今ハ檜扇子やど我ぢさんつゝなかに旅も久々になりてこの巴音
ハ人の軒ごとにたちて食を乞ひて渡ぎぬれどもはかなきことのみにてありつ
しかるにこの程ハ伯父を頼ん力も子なく命ながらへつゝとぎるゝね身れなき身なく
きのふ今日とせまりつる身の上へを数つゞ安堵しもふかく不便しも六月
なかばなく川の中にハ数十艘の涼舟波の上に漕つらね琴三線の音
色おもしろく何にも太都会のありさま耳に驚くハ旅なれど見きゝ浮き
つゝる佐次しが身にハよく已が身の拙さをいまさらに思ひ極め川
なかに身を沈んと揮手より飛びのりたるそのまゝ揺るよりこぼくゞる
船の中へ落入りまで船中の人ゝもおどろきやとおどろきたるがこの船の中

に極口披接とふ人もまじめ琴の弟子多く居合しがこの時披接ハ商人
佐次がが身を助けんとして船の中へおち入りし辞を多くおそれ
とある者ヒが身につまされ不便におもひ介抱をとゞけて傍に側をおね
きゝけるまで毎ぐ歳もかるぬ身なく何者命を捨んとハせしぞ一河の
流を汲も他生の縁とかきくまして死を極めしこの時船に入りて命つ
つがなきハひとへに有るぬ因縁なり身の上をうちあかし語ぶ助力しても
ゆるさせん死をでかハね罪おもくもあるなと涙勃に聞けし佐次ハ甚涙
をながしその親しき詞の礼をのべさてそれより伯父の疎討都をなる
て信濃よりきるしの所く一の日作えしく艱難辛苦をつくへ尋ね
あだこてさくハ一銭の錢へも貯確身すく覚悟をきわめてこの川へ命
を捨んと同のこゝねたかややたゞ一の此船へ落入るは遊興の妨げと

なりしと見えしまでよろこび生じハ揃口ハ是を宮ちふまや深くとうあく
扨ハその才ハ彼が妹のさくらしと佐沢といふものありけるがそこそ易々さる汝が
伯父の諏訪都ありし今ハ揃口検校といふものなりとあるくしまえの
人々ハ音信不通にてありけれどもその才ハ聞ありにハ而しく唯一人と
の甥なれバとてさつさしと思ひなくさきに今日まで見とも必死にのぞみてく伯
父甥の名のりするとハ先祖の霊の引合なりと宮より佐沢ハ善
よろこびつゝ先ぢつめのハ添ありし船にありあふ人々もいとひまま
なる金言と希きこてに称しさりさあれバ揃口ハ佐沢しる名を今日より
諏訪都と改めこの以後ハ何とりて身を立る職業とせんと思ふやらん
琴三絃ハ家にもるとさあれバよく手に侍るべし但し弥ハ望とあらバ
やべしこ年あり定バその時佐沢ハ伯父にいふ揚音曲の業ハ田舎
音ゆくはおぼつかなし何卒針治の業をまなびたしといへバ揃口ハ太きに
よろこびバ今も直に死る入りなば音曲の名ハ老後ハいつでも仁術こそ新め
しさくやがて師となり学ぶせんとて次第なく修行しく上達し言葉ハ
のあらゆるへもおりなく志も一切ありし筆ぶその名ハ早身に売もなれつひには
伯父の養子となりて第さらしとある人のおぼえてある事

慶安　女街　肝煎

今世にて人の口入するをけいあんといひ遊女の口入するをぜげんといひ
これらは世を媒するをすべて肝煎と云俗語をおりけるに慶安といふは
江戸木挽町に大和慶安と云医師ありけるにまた同じ頃に伊達三位
家の儒者長谷川助左衛門とかいふ浪人その慶安と参会し大魂の上なく
世間の人比出入あるひハ男女婚姻の媒妁などなし人々をして肝煎す

ある人ある諸侯の縁辺をもとめ其息女金五六千両持参
の聟にあはさんと彼三人ハ若党をひき合せ其中を二千両だつ
ゝて取たるを仕合としたる所に此年世子あへなくなりき寛文五
年己巳八月廿四日彼三人のやつばら追ひ放されぬとぞそのころより
して人の世話するものを歴官あとおひなどと諸家深秘録にいう又
ぜげんと云ハ女衒の転訛なるよしうるはしきものあるをみてうる衒ハうると
読り俗語を字音にあつるハ文人の附会なりと思ひみるべし俳
人不角が俳諧一蝶討殺集といふあふされしぶぞむしといふ前
句に　女見をバ親父ぢややといふてきる妹　柳水
といふ句あればむかしも女げんといひしとみゆされバ女衒の字音と
いふ事もあるべしまた肝煎といふハやさしき詞なり室町殿日記に

見えたれバふるき俗語なるべし、狂言記に、大肝煎
といふをも見えたり今の如く職名となりしハいとくちをきくとおぼゆ、
世にきもいりといふハ源氏物語にある心いられと云詞と同じこゝ
ろなれバ、即今いふ気のいれると云ことなり、古歌の詞
におもひに身をやきなどにもあるをいふもおなじ、躁急心熱の謂
なり、古の詞にあるくみえたるハ、大須本将門記に、胸上之炎焦
心中之肝とよませ、源平盛衰記に、肝を焦すといふをあるも
ことくハ肝をいるとよませしなり、顔子家訓に、墨翟之徒世
謂熱腹、楊朱之侶謂冷腸、また呂覧に、焦唇乾肺費
神傷魂といふも肝煎といふ字義に似たりといふべし、
中人

婚姻の媒妁する者をなかうどといふハ中人の義なり雙方の中
にたちて婚儀をとりむすぶよしの名なり中人をなかうどとよぶ
るハ音便なり旅人をたびびと商人をあきうどと云例なりさて
朝鮮の訓蒙字會に媒妁俗呼男曰媒人女曰媒婆
總称ニ中人とあり、

敷島此道

安斎の説に、すべて國の道を敷島の道といふ事上古にハ聞えず
後代の詞なり、敷島ハ日本の總名なり道ハ人倫の道なり人
倫の道ハ聖人の教の法なり應神天皇の御代始て聖人の道渡
り来て以来代々の天皇聖人の道を本として我國の風俗に随
ひて斟酌して天下國家を治る法を立て律令格式等をさだ
めたまひしをこそしき嶋の道とハいふべけれ神武天皇東征を始め
代々の天皇天下國家を治るに心を労したまひ君臣ともにうち
とけ哥ざりきましてかゝれハよく治るべき道理なし哥を敷島の
道といふハ哥人の私言なりと云り、この一條ハ論ずるにおよばざれども
と吾邦の風俗ハ武勇に勝たれバめゝしき哥をよまんを丈夫のよくく
出べきことかハ、男子ハ男子婦女ハ婦女らしくころ拵まへを吟詠すること
そ真心なるべけれ文和さんなれバ今の軽浮華になりゆく和歌の風
體も世のつゞき淫靡にのみなりゆくをなげくにいたる聖教ハ仰ぐべ
けれども後学者に偏説をも多し佛説も学ぶべけれども末世の僧徒に
破戒あるがごとく歌道にも名人君子ハすくなくして歌ニすさむ下々も
名をきゝ志をなげくべし因に云もとしきしまとハ大和國の地

名にて、欽明天皇のその都し給ふところなれバ、しき島をまくら
大和の枕詞とハなしたるなり。万葉集人麿が歌にみえたり。これハ後拾
遺集に家高の大和哥といふことあり。それより転じてハ和歌
のことをぞしき島ともいふなり。これハ枕詞をもてすゞろふぞ
此ほかに例なりおしてるや難波のといふして難波宮をおしてる
の宮ともいひ、あし引を山のまくらとしてあし引の嵐などいふ類なり。猶
くはしきことハ石上私淑言にみえたり。

東百官

東百官の名ハ相馬将門が定めし官名なりといふハ大かたの偽説なり。
近世の人官名に似せて安紀したるなり。古記に東百官の名
つきたる人ハみえず。天正慶長のころより以来の書にハ東百官の名つ
きたる人もみえたり。古今著聞集の印本の本巻の十にハ松尾
神主頼母がもとにたつての権守と云翁ありけり。かれがつくり田をも
たりけるお論の事ありて、六波羅にて問注すべきに定まりけり
云々、右の頼母とあるハ神主の実名にて頼何といふ実名なるべし。母
字ハ伝写の誤りなるべし。頼母と書たるを印本にするときにたのもと
なしたるならん。鎌倉将軍の時にもはや東百官の名ありし
とて、右の頼母を證拠に引るハ誤りなり。安斎の説なり。

法華経の巻数

妙法蓮華経ハ誰しらぬものなし。八巻にかぎれるものゝやうにおもへど、宋蔵
明蔵および清朝の本にも七巻なり。空華日用工夫集
貞治六年十一月五日の条に、法華本七軸、本朝伝八巻

者乃慈覚大師為八講舎分為八巻而配之蔵本有
七巻乃添品也非今本也とあり、案ずるに法王帝説に、
太子の法華經疏七巻を作るといひ、又日本霊異記に、鯔
八隻此法華經八巻に化したるよし見えたり、されバもとより
七巻にも八巻にも分てると見えたり、按ずるに出三蔵記梁僧祐記
に法華七巻とし、慧琳音義に八巻とあり、開元釈教録にも七
七巻とも八巻ともあるよしなり、

草書心経

ある人の説に、高野大師の真蹟真艸二體の心経今も世に
遺れり、唐土にても書に名ある人此書に経文ハ名家の真蹟経
晋の時に書しるく仏経あり、心経ハ唐の虞世南の書きし
より續に褚遂良の心経あり、いづれも真書なりけり、睿宗
の時に至りて鄭萬鈞艸書心経を書すと唐文粹に出づ、
大師より八凡百年ばかりも古し、總て艸書にての心経文
希なるを大師なりにやとおもひ侍りしに己に然ども
さやく大師より以前にあり、但しこれより後ハ聞ゆることなし、
北宋に至りびて蘇黄此諸賢禅宗を好みしゆゑ仏経を書
しこと多し、宋末に至りても蒲萄の能画なる僧日観に行書の
心経あるよし剡源集に見えたり、

いらたかの数珠　平形念珠　二連数珠

謡曲の詞などにいらたかの数珠おしもみてといふことあり、いらの
たかといふハあらたか此轉訛にて阿羅多迦ハ念珠の梵名なり、

あかの水をさす例なりとあるべし、また此宗要文の浄土宗の條に、大
勢至經を引て云以平形念珠者是外道弟子也、非我
弟子我遺弟必可用圓形念珠とあれども今はおほく平
形のものなり、ただし異邦より舶来のものは多く圓形なり、按るに
わが邦の念珠を造るもの平形がつくりならはしたるなるべし、またある
ん、また今浄土宗にて二連の念珠をもちゆることのよしは浄土宗諸
廻向宝鑑に浄家二連數珠濫觴出御傳、上人常成
給仕有謂阿波介念佛者仕出二連數珠、始此阿波
介彼阿波介持百八數珠二連其所以者人弟子委
隨為上下盡易其緒一連稱念仏一連取數所積數
取弟子易緒被盡とあるによりて圓光大師の御傳を案ず

なる阿波介といふ陰陽師、上人に給仕して念佛するものありけ
り、その阿波介百八の念珠を二連もちて念佛しけるに、
その故を人たづねしかば、弟子ひまなく上下すれば其
緒つかれやすし一連にては念佛をまうし一連にては數をとり
てつもるところの數を弟子にとれば緒やすまりてつかれざ
るなりとまうしけれバとみえたり、されバこの御傳をもつて今の
二連數珠の始とするハ非なり阿波介の念珠二連をもちひるまで
據にはならざるべし、和漢三才圖會にハ大樹寺の上人造れるよ
しいへるも謬なり、兎徴和尚行業記に、師生平唱歸之數
珠五十四珠而別穿麦形二十珠鉤鎖相連搦之記
數蓋鉤瑣二穿以一過為千声也且麦形之新製護

其殊之故也、天下浄業之徒尤為便稱号取以為
則厭菲效之とあるをもつて正しき證とすべし、こゝに忍徴の世
十六歳の時にあたりて貞享三年の事なれバ、されバ浄家の二連
数珠ハ世にひろくいできたるものなり

氏寺

氏寺といふハ氏神といふに同じく、神護寺を和気の氏寺なりと云
ふを源平盛衰記に見えたるハ已に氏神の心より願ありて出さ
るなるべし、又古今著聞集に法成寺の御堂の薬
師堂とぞいふなる、源三位頼政がける先祖の氏寺なり、また平家
物語に治承五年正月一日の日内裏にハ朝拝もとゞめられ公卿
一人もまいられず、これハ氏寺焼失によりてなり、また遊行廿

四祖他阿記に、永正十七年六月廿九日信濃より甲斐へうつりたまふ國
堺をきたる所に村山といふ里に日なたの図書助と云人あり、自
身兄弟とともに輿をかきさげて氏寺へ入まゐらせなどいふ事も
見えたり、又江談抄にもありと書見えたり、

古畫を證とす

安斎随筆に故実を考ふるに古画を以て證とするとあり、古代の
畫工當時眼前に見る所の體を直にうつして書きたるものなれバ是
後代に至りてその昔の事を考ふる證となる所なり、されども是れむ
かし畫工後代の證に備へんとの志なく畫きたるものにあらざれ
ハ唯その事物を大體に似せたるのみなり、諺にいはゆる縛かうだと
も云ふことありて又細密なることぞその通りに畫てハ畫體見えざるべし

きやゑ省畧するところなりされバ古畫ハ信じがたく證とすべきものなれども見づきなきあり捨べきなきなり取捨ハ学者の意にあり古畫なり
とくも悉く信じて取捨せざれバあやまりなきにあらずといへり青蓮院にありといふ古畫の小野道風の像に硯筥を左に書けり又明の仇英が画帖を見るに硯を几の左りに畫たるを二三ところ見たりされバ硯を左に置くこと故あることにやさもあらん秘傳花鏡の花園款設に郝堂室坐几の條に古人置研俱在左以其墨光不閃眼且於燈下更宜といへりこれ古畫を證とすべきの一なり

郭巨が黄金釜

盍譽孫に郭巨將坑兒忽見黄金一釜上云〃蒙求註に孝子傳を引けり今廿四孝の圖を繪けるもの金釜を畫くハ誤なりこハ一釜に滿る黄金を得たるにて金釜にハあらざるなり法苑珠林に右の事を載せて於土中得一釜黄金とあるハ益證とすべし過し手画師永納が郭巨が故事を畫けるもありし永納ハ本朝画史などの著述あるほどの人なれバ蒙求をよろしく云見黄金一釜とあり金の釜なるべし一金釜とあるべきを黄金一釜とある附ハ釜といふハ量の名なり論語子與之釜の釜にて釜一釜の金といふことにて金釜にハあらざるべく圓き形ハ金銭を畫くべきなれどこれもまた非なり論語の注に釜ハ六斗四升とありて斗斛の類にて目方のことにあらず蒙求注に釜上孫に云とあるをみても六斗四升ハ釜にいれたると知るべし

その八、画史會要に載するところの図

画史會要に島絵とて載する埋児賜金の図にハ[⦅⦆]かくの如き金を数多く堀いでたるさまなり、円書に載る探幽が図にハ冊かくれ如き形になかり、是ハ釜になかくてハふかきさまにや、これなりの図にても己にさながら釜上銘のふを本文にあらざれバ誤語なりといふべし、

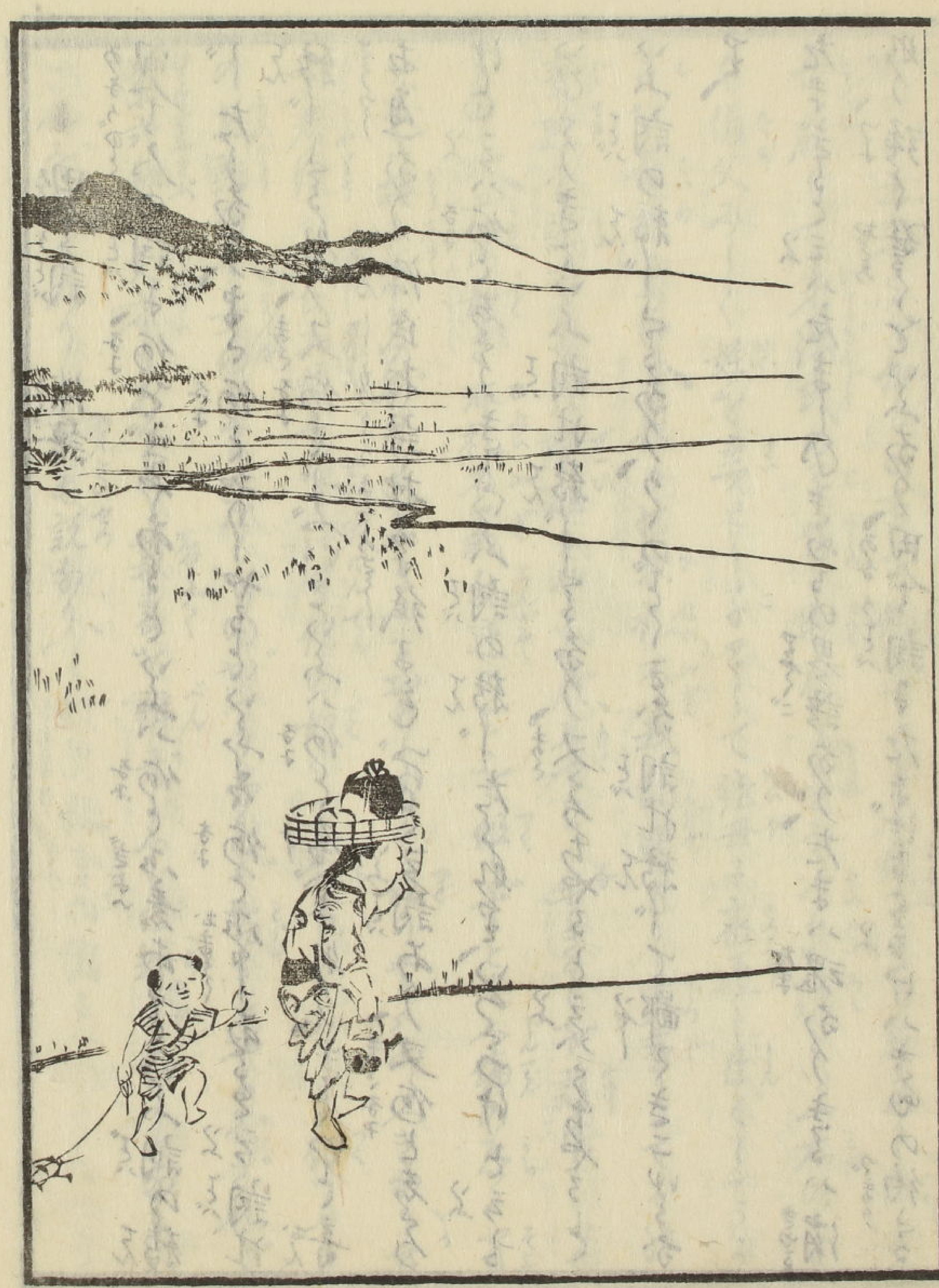
源氏物語

源氏物語のはじめに桐壺のみかどといふ帝あり、更衣の女官を寵愛しのひ、その腹に皇子出生ある、是を光源氏といふ、その母はやく死去す、帝哀に堪えずその心の慰めに帝の姪なりし姪宮を中宮とし、藤壺に住せしむる、是ハ伯父にて姪を妻とするなり、光源氏ハ藤壺の宮に密通す、是継母に通ずるなり、それ藤壺の腹に光源

氏の子出来たり、帝これを知ろしめさず我子としたまへり。後に
帝崩じて光源氏の子冷泉即位なり。是を冷泉院といふ。右のごと
く伯父なるもの姪を妻として子をまうけ、継母に密通して子を
生ませ帝位につけ、これらは非礼不義乱逆なる実事にてそれ
事跡を記すなれバ是非におよばず、素より寓言を設けてつく
るなれバ右の如き非礼不義乱逆のことを綴るとも人倫の教に背
かざる好色のことのかぎりいふやうもおもしろく綴りやうハあるべきなり。云
学者流ハ源氏物語を聖経賢伝の如くに尊べどもあしき綴りもの
の物語なり。女のつゞりたるものがたりなれバ咎るにおよばざれど、
紫式部ハ文才もありて、荻妻を辯ずるほどの智もありしなれバ
これを咎めらるゝと安斎説なり。

田舎詞　俗語

男なる人の詞に、何をぎやあるといふハ何と不審あるといふ詞の転
じたるなり。まさ何とおりやるといふを何と御座あると云詞の
転じたるなり。又何とすゞいといふハ何と為べきなり。きといふ音
相通なり。源氏物語枕草子紙などにも云詞あり。又何と為べ
けと云ハ何となりきといふ詞の転じたるなり。いふつけと云も
いひつけきといふ詞の転じてなり。又うちやると云ハうちやると
いふ詞の転じてなりかくのごとく云なり。詞の転じて鄙くきこゆるな
り。
たまぎると云ハたましひきゆるの略語なり。たまハ魂なり、きるハ消
なり。強く驚くをいふなり。田舎詞にたまげると云けハきゆの約なる



なり（きゆの切音け）古歌に雪消をゆきけと云消えゆく上にいふをけ
たゞよふとよめる類なり、江戸詞にきまるをつぶれといふハ鄙俚なり、田舎
詞にまゝあるといふハ古雅なり古風なるを、田舎に多く存りて面
白江戸にハ漸々すたりゆくまゝなり、
俗語に物事猥なるやうに乱り行るをしんまくすると云ふしんまく
といふ字詳ならざりしに寛保癸亥年南溟といふ僧梓行の
続沙石集といふ書あり、その才五に火葬の坑に向ひて屍を焼て
食する物ぐるひを述し事に付て教戒を記したる詞に人ハ
常に慎莫の二字を忘るべからず慎莫夜行慎莫不惑慎莫
不孝等也とあり、慎莫の二字ハつゝしみて何々することなかれと
いふことなり、これにて俗語のしんまくと云ことは始めて心付たり、千年

の人著せる書なりとも書をバ見るべきものなり、不慮に知見を
開くことあり慎莫の二字古よりある詞なり、
ひきようと云詞常々人のいふことなり古今著聞集にもしばしば見えたり
その外にも古書にもある詞なり比興とかくハ誤にて例のあしき字
なり、非の字を用ふべし興もなきを興のさめたることなどといふ意
なれバ非興と書べきことなり、比の字まゝくハ義理通せざれ、
ごさんなれといふ詞平家物語その外にも古書にをあり、この字格
てよむハ非なりごさんなれとハこそあるなれと云詞なり何とぞそ
あるなれと云事なり、この五條ハ安斎随筆にあり、
進士随筆に遊里にすいといふことハ久しくいひならはせると見えたり、
職人者の詞書にすい法体ぜなとありといへり、醒斎の記に七十一

書職人共草率に、すべ陳ぜよ飛しりくびやとうきあやまてるを
見てそるひがごとなり、古本にハすべ陳ぜよとあるをや、今按に
すべとハいふ詞なるをまことなるべし、粋の字音なるべし、万事によく
きくといふ義なるべき、江戸にて通といふを大坂にてすゐと
いふ、通とハ万事に通達する義なり、禁短気に、いやがる
ものにきらせく粋のてれしめをこらしあ、まさらあらず粋のいきろ
たちるうのここんぐる大臣などみえたり、この外にも猶あまた沢
るべし、
江戸にて盗賊をどろぼうといひ、大坂にてハ放蕩者をどろぼうと
いふ、今按するに盗賊をどろぼうといふハ取ぼうといふ詞の転れり、かの
ものを盗ミ取より起れる稱にて、どろぼうといふハ人をいやしめいへる詞なり、

吝嗇なるものを吝ぼう色黒きものを黒ぼうといふの類にて
この詞の例多くあり、放蕩者をどろぼうといふハ、どらといふ詞の轉
なり、これどらといふハ堕落の訛言にて取締なき人をどら
といふ、あるひハ音ずしとも是を記あり、また今昔物語の度羅嶋の故事
より起るといふ説もあれど、いづれかあたれりや、
或書の説に、すべて女の男擬むにハ心をハ兄より人をなつんぞ必し
も男さいあんハ父母のゆるしひに従ふべし、我とちくひあひつる中
ハいかにもいやしきことぞ多かりなんと十訓抄にありしと
なり、今も男女ここそ知る心をうちあけてちぎりたるといふハいやしき
詞とみえたり、
瘠たる人をひがいすといふをのよし、友人滝口主水輔の説に海魚

鰭にハひれハす漢名いまだ詳ならず鯊魚に類あり、そのかたち痩て
骨高きを以て土佐の諺に瘠人をひれハすといふとぞ
なべて世の人情ハかはらぬものなれバ、詩哥に物を添ずるもこゝろ
すさんハおなじかれどその詞の取捨異なるのミ、されバ句題に哥を
白氏が句を定家卿のよまれたる哥どもそれたゞまさなるべくも
按んずるにかゝる鄙賤のものにたとへても月ハ月花ハ花、ことに其実を
いへるかひたるとなれど詞に雅俗によりてそのとれざるもしく
聞ゆるといふべくこゝろさためあるなり、ある人云陸放翁と西行法
師とハ時代も大かた同じくその吟咏のたえて似たりと、放翁の詩に
何方可化身千億一樹梅前一放翁　西行の哥に
よしの山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねん

といへるハ詩哥ともにその心おなじ、まさに唐詩の陌
頭楊柳枝已被春風吹妾心正断絶君思那得知とい
へるを賦南郭の和語に訳したるに、
春のくれ青柳すがた風に吹れてなびく心の、こがしが心ハやる
せなやなさけごころにありハせん、

省文

省文に於て別ありそのおほむねハ已に文教温故にいへり、省文に
似て省文にあらざるものあり十二支の寅を刀に作ると、安斎の記
に寅の字の代りに日本にて刀の字を用ゆと刀ハ火熨斗の
如くなる器なり、軍中にて湯をわかし食物を煮る物なり、二
ましなどの如くおなじ物なれバ用ゆるといふ人にて寅のかハイ

に用ゐるなるべしと云説ありといへり、刁斗をかけるは如く打鳴らすよし
は漢書李廣傳に不擊刁斗自衛、注に孟康曰、刁斗以
銅作鐎受一斗、晝炊飯食、夜擊持行、故名曰刁斗と
見えたり、刁字を用ゐるとも、やすきにつきて見えて扶桑略記抜萃に
十月甲刁日とあり、まさに盡を尽に作るは盡の字體なると
かゝるより字體を真書となしくらべしかるなり、一体によりて書
を呑書をも畫に作るは非なり、まさに釋を釈に作るは釋尺同音なる
ものハ筆画のすくなき書写に便ならんとての假借なり、文字は似たりといへ
ども澤を沢に作るは非なり、そは澤は人の音なれバなり、秉燭譚に
云今俗に田一反といふは反は段の字は字體なり、互市の互を牙の
字に書て牙行と云と同じきなり、互の字書牙は字に似

たり、逆に牙は真字を書くなりといへり、

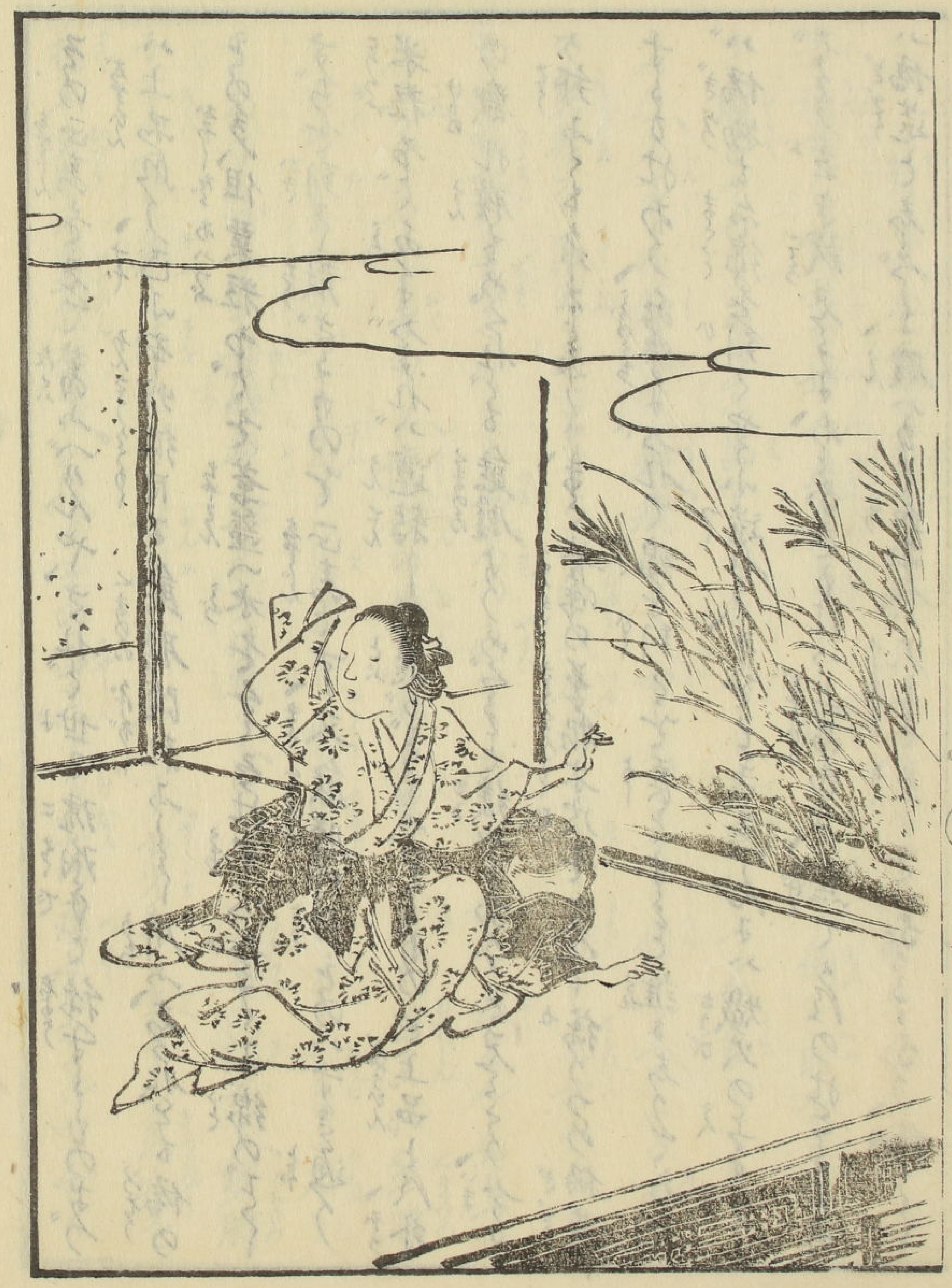
時の鐘

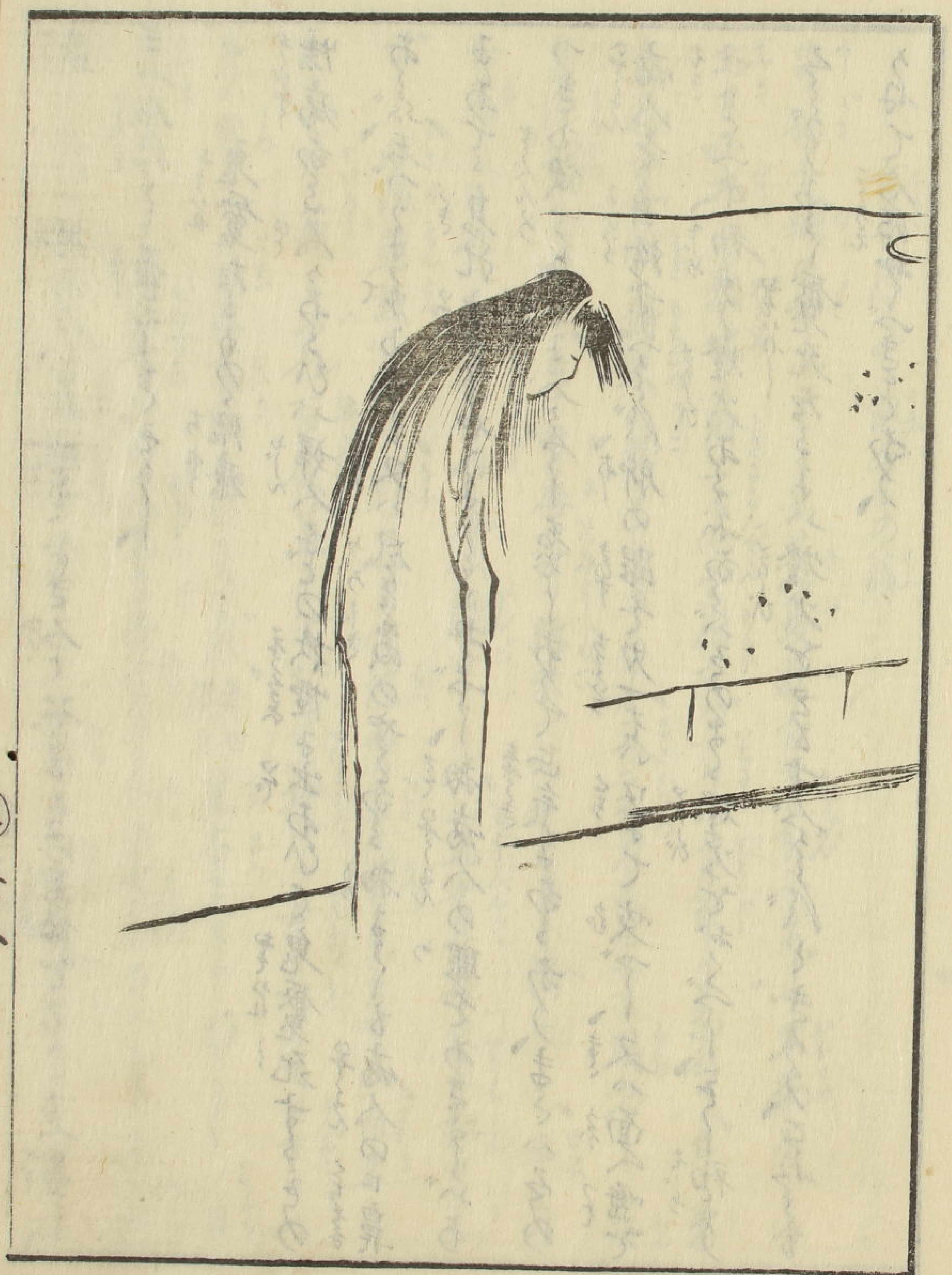
晝夜六時の鐘は数は本朝延喜式に見えたり、諸時擊鼓子午
各九下、丑未八下、寅申七下、卯酉六下、辰戌五下、巳
亥四下、並平声鐘依刻数とあり、まさにある説に時の数より
さて晝夜九ツを数の始りとして、九ツ時は数を九ツにて会するなり
是たとへば六ツ時は六九五十四にて六あまるなり、五ツ時は五九四十五
にて五あまるなり、四ツ時は四九三十六にて四あまるなり、九ツ時は九九八
十一あまく九ツあまる、八ツ時は八九七十二あまく八あまるなり、七ツ時は七九六
十三にて七あまるなりといへり、さていとするハ楊子雲が太玄経に見え
たり、五行大義にも太玄経を引ていへり、

熊膽の功并ニ真贋の辨

子癇とて懐妊の婦人月数重りて俄に気絶し倒れ眼をつりて
き瞳子をつりあげて歯をくひしめ手足をふるひ動かしける
なり。人事を知らず癲癇やうの如くなるを子癇といふ。すみやかに正真
の熊膽を濃く立て呑ましむべし。口中へ一匁程も用ひて甚妙なり。世
それ効験を直ちにあらはす故、右の病する婦人の命を救はんと知るべし
是皆是ある故なり。懐妊の婦人ある家にハ兼て正真の熊膽
を求め蓄へおくべし。急にハ得がたし。母子用をなくすを赤子ニ用る
ともあり。いづれにも求めおくべきものなり。とこれら書物の記あり。熊膽
を蓄へて急に備ふるを妊婦のみならず、小児ある家にハ急病を
救ふ必用の薬品なり。されどその正真と下品の猶慎くなくバいかでか

その正真をもって蓄ふべけんや。されど世ニ琥珀手と称するものあり
ハ上品なり。已に本草綱目ニ熊膽偽乱多し用ふる人よく偽の
その多し。但粟粒ほどを茶盞へ水をたて其中へおとすに線のごとく
すぢを引て散ざるものを正真とす。又熊膽の佳ものハすき通り
米粒ほど取て口にふくめバ運轉して飛がごとくめぐるものを上品とす。外
の獣の膽もめぐれども熊膽よりめぐること遅やうなりと見えたり。今ハ
が邦にてもよくよくこころすべし。まづ苦味の草柏木皮をせんじ練りつめ偽造
するものあり。水中につれて線を引くを良とすると誰もしりてあれ
バ偽物も白線を引くやうに造りて、そをしきまへんにハ熾火の上にすこし
おきて試みるにあたたまれバ上品なり。焦て皮のはぜるもの
ハ偽造とおもふべし。膽ハもと血なれバ火上に置ときハあぶるるなり。練りて





造るものハ搆あり、これ驗定なき人と云ども其の術をなす事易し、
三ハ心得して益あることぞかし、

鬼魘たるものゝ治療

癔病なる人かあるひハ婦人などの妖怪に出あひて鬼魘死することの
あらバ忘れずに手ふくも又ハ風呂敷のやうなる物まくも病人の口鼻
にあてゝ息の出ざるやうにしてはやく、扨病人の眼をあきるやうにバあ
つき小便一杯口にいるべし、是しあつて正気になるなりまたハその
病人を喚活すべし、脚の跟を力一ぱい歯にて咬べし、又ハ面へ唾を
吐かくべし、初より燈火あるならバそのまゝ燈火をおくべし、もし初より
くらがりならバ魘死たるにハ燈火をてらすべからずときけり、これらも
かねて心得おくべき事なり、

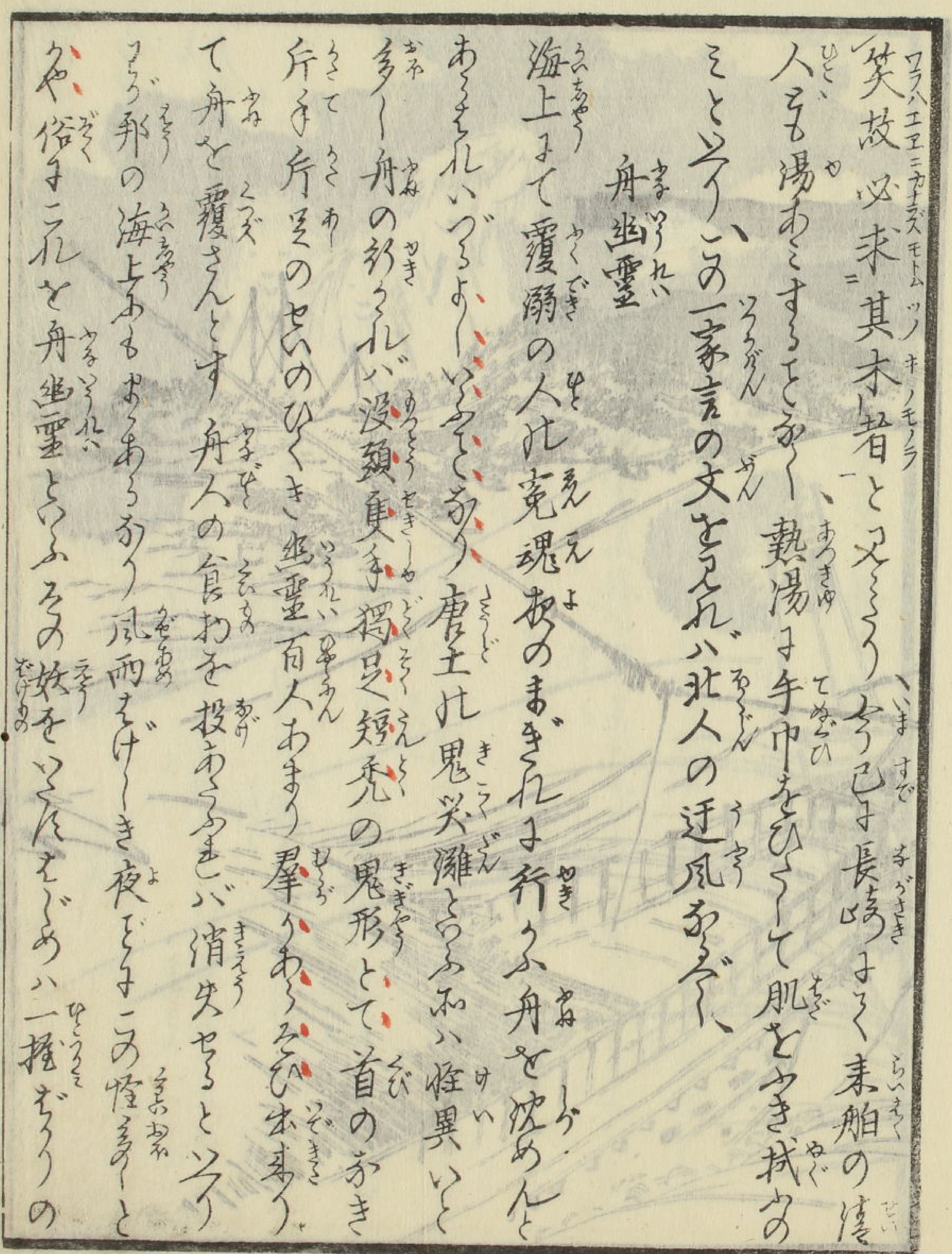
食せずして飢ざるの法

串柿を糊のごとくにして蕎麦粉を等分にまぜへ大棗などの
大さに丸じ、朝出る時二三丸を用ゆれバ一日の食事になれり、蕎
麦粉なき時ハ餅米の粉にてもよろし、又三色あはせても用ゆべしと安
斎漫筆にあり、又くろ胡麻一升糯米一升をよく粉にして、棗一升
を煮てこれへ二味をこねまぜ、団子として一丸食すれバ一日飢に及バ
ずと白河燕談にあり、扨これら法あり、又よくまきたるハ白米を
斗を井籠にいれ百度蒸し干おき一握づゝ毎日のみて三十日の
先ハ死まで一切の食物くひたくなし、寿世保元 黒大豆をよくむして一日
食物をくはずに翌日より黒大豆を食し外の食物をくはずして湯
時ハ水を飲べし、如此一年すれバ後にハ一切の食物をくはずとも

くて仙人となれる、法ハ黒大豆五合胡麻三合水に一夜浸し蒸すこと三
度、さてよく干して二色ともに手にて皮をさり舂てよく拳の大さほ
どにつくね甑の中に入て戌の時より子丑の時まで蒸して寅の日寅の
時に取出し日に干附て食ふべし、拳ほどなるを一食へバ七日飢
ず、二食へバ四十九日飢ず、三食へバ三百日飢ず、四食へバ二千四
百日飢ずして顔色ますます麗く手足の働き少しも常にかはることなし
王氏農書　この二方ハ唐土にて飢饉の時に多く人を済ふる名方なり
とて、人因に云、人の通はぬ谷底又ハ井の中などへあやまちて落
入りたる時、或ひハ海上などにても一切の食物なきところにて、命を
つなぎ或ひも身體気力おとろへざる方寿世保元に口に唾を一二
ためてハのみこみ又ためてハ飲こと、かくの如くする事一日一夜に

三百六十度飲こめバ何十日にても飢ずといへり一説に月につきて五知あり、
正徳のころとかや、奈良宗哲といふ人武蔵に住してありけるが常に
こゝろやすく交る僧の行脚ありて七日路食して礼拝行をなす同
行の僧一人あり彼僧に右の唾を飲こむ方を教ふ彼僧ふかく信じ
て相勤む、同行の僧ハあざ笑てこれを用ひず、行法六百日に至り
て同行の僧ハ手足痛みその外になやましむ又唾を飲てし僧ハつ
ねにかはることなく行法つゝがなく満願成就しけるとぞ、按ずるに
この唾を飲こむの方ハ効験ある事なるべし、按ずるに唾ハ身液なれバ吐ずし
て飲まバ身體の潤をますべきことなり、常の養生にも心得あるべ
しまで延唾ある挽寿を接すと医方に見えたり、
唐人ハ絡せずといふ諺

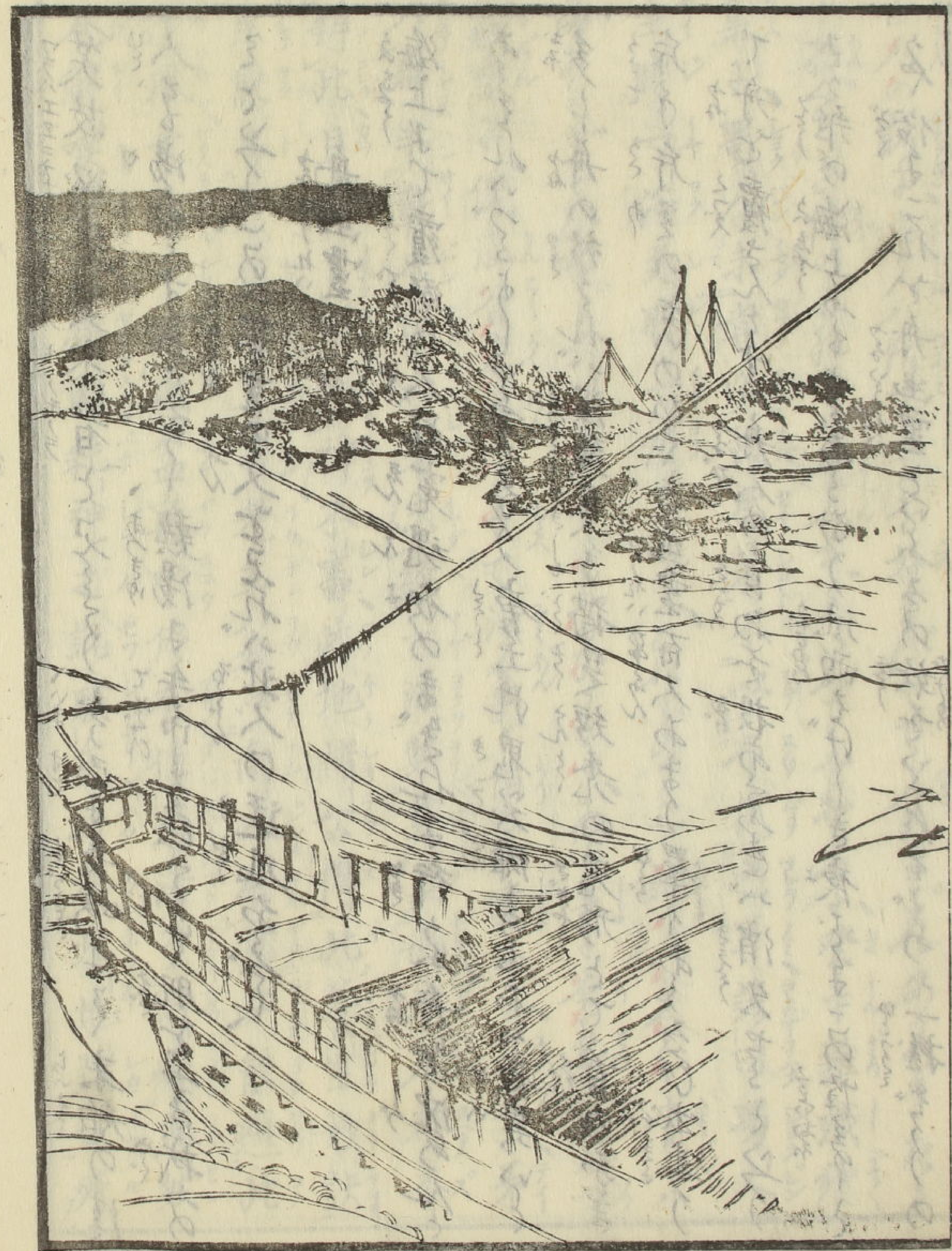
世人の諺に、唐人は浴することを好まぬとて、人のよごれあかつきたる
かたくさき性のものをば唐人めきたりといふことを聞ず。癸辛雑識續
集に、蜀人未嘗浴。雖盛暑不以布拭之耳。諺曰、蜀人
生時一浴、死時一浴とあり。これらのことを訛りつたへて、唐人は
湯あみぎらひなるといふはいぶかしやと思ひたるに、ある書に李笠翁が一
家言に、倪涵谷孝廉にあひて澡盆を借るの書あり。其文に曰、
入都半載塵垢満身未經一浴無其具也此土人都不
辨此且謂多浴耗神不蓄此地諸公得此養生妙訣
果能与彭錢比算否老年翁以南人居此以能避此
迂風幸為一假磁盆寓中倘有但恐浴至婦處忽然
尾解喫驚致病則耗神之説験矣將為此地諸公所



笑故必求其末者とあるなり。今已に長崎に來る來舶の清
人も湯あみすることなく、熱湯に手巾をひたして肌をやき拭ふ
ことなり。この一家言の文をみれば北人の迂風なるべし。

舟幽霊

海上にて覆溺の人は其冤魂波のまぎれに行かふ舟を沈めんと
あらはれいづるよしいひつたへたり。唐土に鬼哭灘といふ所は怪異いと
多し。舟の行かよへば没頭隻手獨足短禿の鬼形にて首のなき
斤々斤足のせいのひくき幽霊百人あまり群りあらはれ出来り
て舟を覆さんとす。舟人の食物を投あたふれば消失せるといへり。
我邦の海上にもまゝあるなり。風雨はげしき夜などに一つの怪ありと
かや。俗にこれを舟幽霊といふ。その妖をさくるには一樋ばかりの



綠などの風に飛び来るごとく波にうきうき漂ひつゝやがてその白きも
のやゝ大きくなるにしたがひ面かたちいでき目鼻そなはり腰より
声あらく友を呼ぶに似たり忽ち数十の鬼あらはれ来て出没
す已に船にのぼらんとする其勢ありて船に手をかけて舟乃
さしきをなやむ舟人どもも漕行のなやみとあるゝ鬼声をあげて
いかさまやといふそのものいふ話音分明なり一犬舟人の俗語に大
柄杓をいなさと名づくるよしなりさて東に剿くる者柄杓の当を
ぬきさりて海上に投あたふれば鬼去りて力をきはめて水を汲
みいれてその舟を沈めんとするのわざきありめし当あるもの
をあたふれば波をしのぎて舟をまつむとぞいふ　また風雨乃夜は海
上の舟人の目あてに陸より高き岸に登り篝火を焚ことあり

鬼もまた洋中に火をあげて舟人の目をまよはすこれによりて
人ことに疑ひを起し南なるが人は焚にや北にあるが鬼火なりと
舟人を失ひなれども波に漂ふひまに終に鬼のために誘はれて
溺死し彼と同じく鬼となることもありある舟人のものがたりに人火
は所を定めて動かず鬼火は所を定めず左にあり右にうつれ
鬼猶且なく数十の偽帆をあげて走るがごとくす人もしこれに随
て行くときは彼がために洋中に引かるなりこれも人帆は風にしたがひ
て走り鬼帆は風にさからひて行くとぞいふ　されども此場にのぞむとき
は事にあたりし老舟士といへどもあはてゝ心あきら地に出ることかた
きものとぞ

兇咀験

安斎の記にある人問て云人を恨ることふかきものありて其人を咒咀し神木などに釘をうつ事あり婦人の所為なり神は非礼を享ずといふなれば験あるまじきを験あるものを見聞せりその理をしりがたし答云人を恨み憤るとも初は胸につゝみてありきれぬになれば、あまりて口より溢れ出て人にも語り揚り言ふもいひ出さんなどすれば言語にも罵りいふのみにては事たらず心に怨恨ひかねて形にあらはし態にうつして恨み思ふ人を一途に悩さんと欲する執念ぶかさにおもひつめし神木に釘をうちきの咒咀をするゆゑ神気かくさんなるが故に其強気邪気におかされて人悩むなるべし悩さるゝ人は彼がさぞ恨むべしと思ふ心の虚あるが故に其邪気にかぶるゝなり漆の気にかぶれ熱病人の気

にかぶれて病がごとし我身に虚したるものなればかぶるゝことはなきなり狐の気にかぶれるもおなじ理なり此かぶれるをいはゞ万事にあり思慮すべし平しき人にかぶれては善人となり邪なる人にかぶれては悪人となるなりとかぶるゝことを文字にかうぶる感とも感冒などゝ書べし

欺て冤魂を敬

人は初一念こそ大事なれたとへば臨終一念の正邪によりて未来善悪の因となれる如く狂気するものも金銀財色情の事にのぞみ追りて狂を発する時の一念をのみいひも口ばしりみるものなりある人の言命にて人を殺ばかり罪にはなんぞといふことさへあらず家業とてども殺生の状はあるまじて庭なる露もなく枯まつる樹を切り見よと

こゝにおいてやがてその木の下に行て動しけれバその人におきける
露あらはれしさてその人大に怒りてその如く云つける人よりハ
太刀先にてきられしといひしとかや誘ふも盗する事ハ悪からで縄よう
こそこゝあしと云る事にて人情といふべし これにつきて一語あり何
某が家僕その主人に對し指る罪なかりしがその僕を斬れバ
人に對して義のたゞしきとありしに依て主人その僕を手討にせん
とす僕憤り怒て云やうさしたる罪もなきに手討にせらる死後
に祟りをなして必取殺すべしと云主人それをきひて汝何ぞたゞりを
なして我を取殺すことをなさんやと云ハ僕いよ〳〵いかりてなんよう
殺さんと云主人それにて汝我を取殺さんと云で何の證をなし
今その證を我にみせよその證にハ汝が首を刎たる時首飛で庭

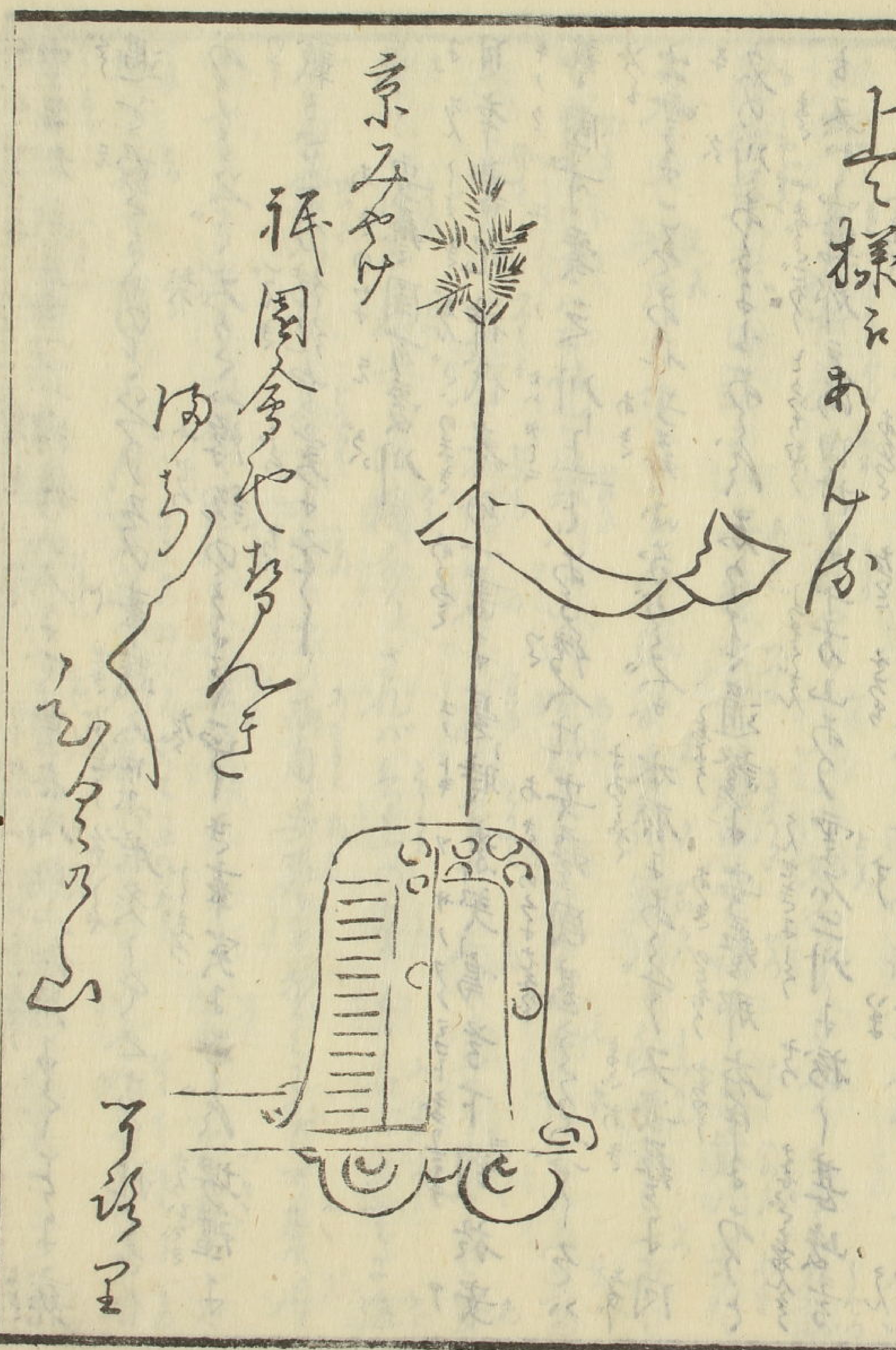
石に齧つけ夫をみれバたちまち證とすべしと云て首を刎
たれバ首飛びて石に齧つきたりその後何れたちも恐ある人
その主人にそれ等を問ければ主人こたへて云僕初にハたゞそれ我
を取殺さんと思ふ心切なり後にハ石に齧つきてその驗をみせん
と思ふ志の一筋なりさらんにて望しめ来たりをなさんことを忘れて死
たるによりて祟なしといへり

豊太閤

豊臣太閤の素生ハ知れざる事なるを甫庵太閤記をみるに母ハ持萩中納
言の女と書れどもあとかたもなきことを取り持萩と家号をつけし公
卿ハなきものをや豊臣ハ豊太閤まさ世にいましける時に定めし
たる書なれバ父母ハ知れざるよしなり生たちのことハ老翁の語

子収めたる太閤出生記に実子なるべしさて朝鮮を攻し後に大明を攻んと欲したるハ器量大なる人とて称美する人多けれど安危の論に器量の大なるにハあらず器量小さく欲ふかく大いなる人なり器量と云ハ才智なり豊太閤ハ無学文盲なる人にて悪才智あり善才正智ハなし唯虎狼のごとく武威をもつて人を怖畏せしめて国を治めんとす假令朝鮮を抜きえたりとも何の徳ありてか其の後をよく治平ならしめんやいはんや大明をや治術を知らずして大国を切んとせめたまふハ是欲心限りなく広大なりしゆゑ器量ハ甚だ小さき人なりと云りこの論実にしかり己に見原篤信の懲毖録の序にも朝鮮征伐ハ所謂忿兵貪兵なりと云り

曽呂利新左衛門自画賛



原本縦二尺六寸五分 幅六寸三分

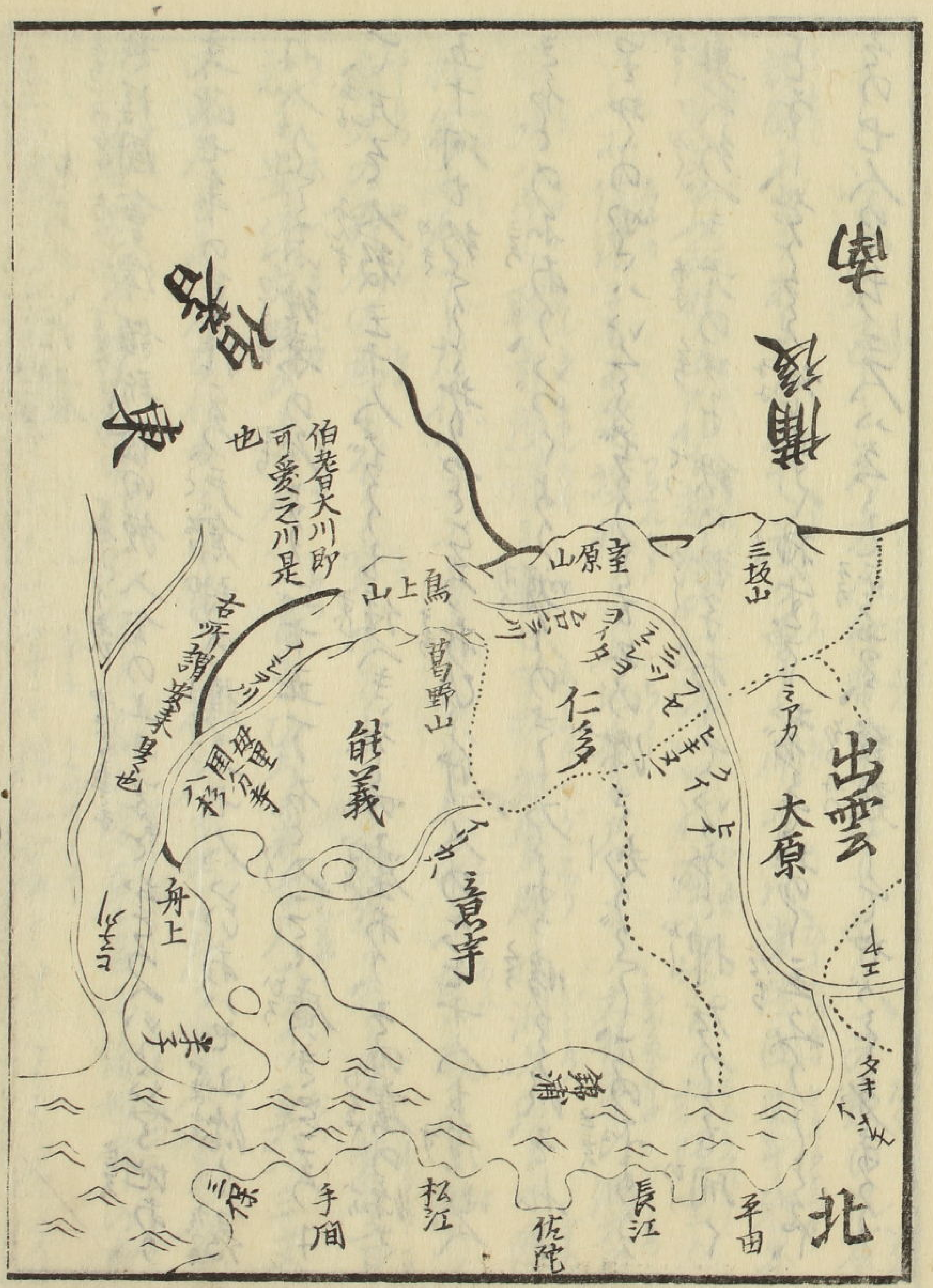
曽呂利新左衛門ハ滑稽の人にして豊太閤の御伽衆にて寵遇をうけるものとぞその事蹟人口に膾炙してくさ〴〵此たぐひありといへども大かたハ浮説のまじりて正しき事実にあらず堺鑑に載るところ傳記ぞ實に乏し

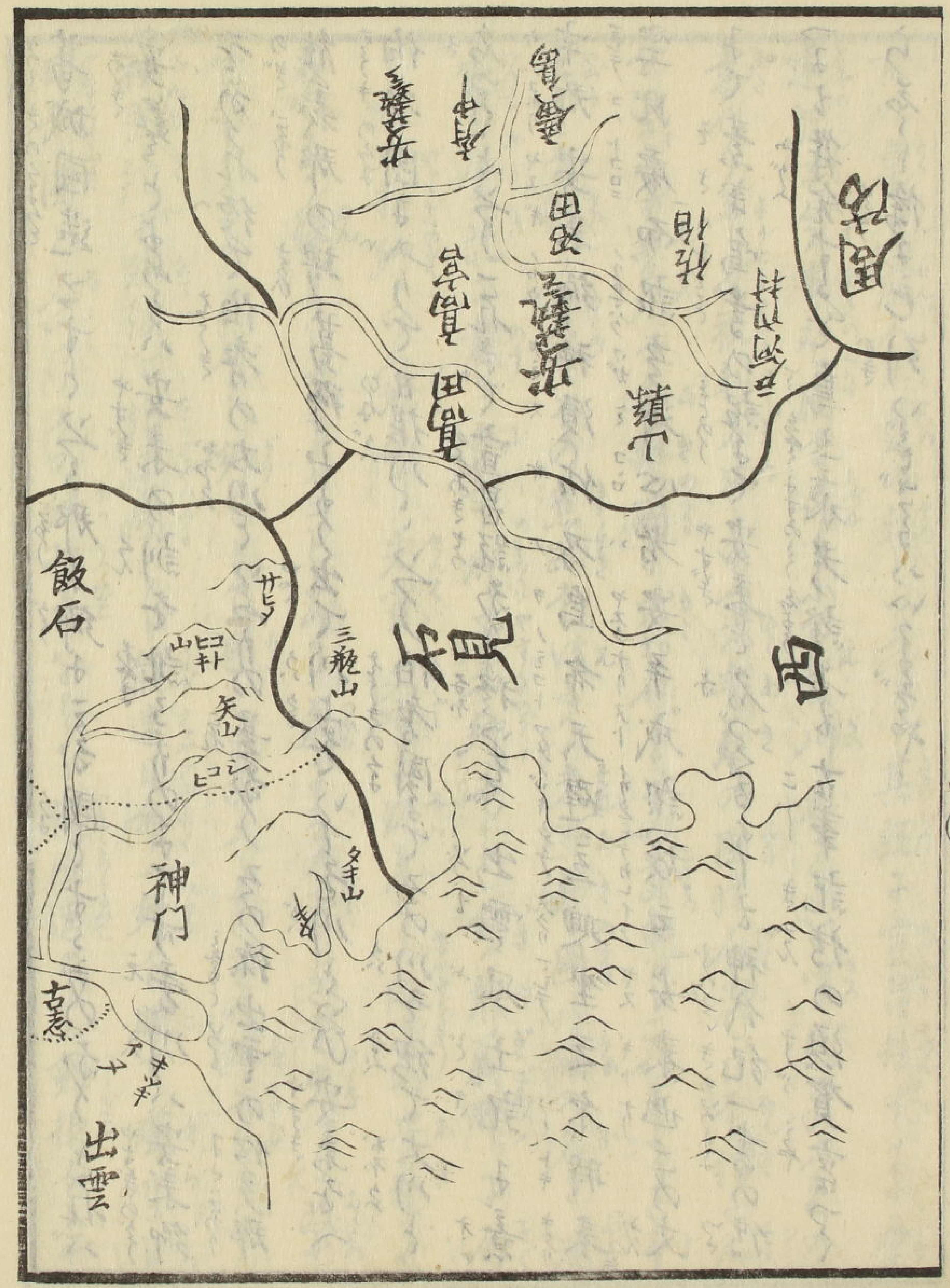
安藝國可愛川

日本書紀神代巻の一書に是時素戔嗚尊下到於安藝國可愛之川上とある傳へ此安藝國甚まぎらはしそハ出雲に一つあれ安藝にかゝるべき水脈にあらず又安藝に同名の川あるにもあれど若あるハ通證に安藝郡府中にありとも又ハ山縣郡戸河内村に千方山あり雲石二州に接し甚峻高ふかく石窟ありて相傳ふ大古大蛇こゝに住ありといふ今にいたりて雲霧朦朧として風雨時なく其郡に可愛淵といふあり十方山に出づ奇石怪巌多し疑らくハこの地なるべしといへりまゝ私説藻塩草などの説にハ安藝出雲ハ疆界を接す蓋簸川安藝にありて埃川とあるをもあるひハ可愛川簸川とも源を一にして出雲まではこれを簸川といひ安藝にこれを可愛川といふ説あまで誰まで一書に大蛇の居る所を高上の峯とす出雲と安藝とハ堺を接する國なりされバ高上の峯より西北出雲に流るゝを簸川とし高上の峯より西南安藝に流るゝを可愛川とするもといへりこれらの説ニ非なりといへども出雲と安藝とも堺を接する國にあらず寛政年間藤原宣昌といふ人高上二水考證と云書をあらはして簸川可愛川の辯ありそのいふところ千

古の卓見前人未發の説といふべし其説に宣昌按ずるに重
遠説に今安藝國をいふ可愛川あることを以ていふもの
當れり吾友祝利万呂といふ者安藝の國に在て日本紀に
をひそめ可愛川を安藝國に求むれどもその處なし これによりて吾
出雲を探り索てその舊跡を得たり 夫安藝國は國の名に非
出雲風土記に載る意宇郡安來郷なるべく今能義郡に属
して八杉郷といふ地あり 先輩の文字に泥みて山陽道の安藝と
あやまり混じてアキノクニとよみ遂にその正しきを失へり 故に
ヤスギノクニとよむべし 郷をもて國となすことその證少からず
神武紀に難波を浪速國とし饒速日命是郷を睨て虚空見
日本國と名づけその他珍彦をもて倭國造とし剣根を以て

葛城國造とすといへる郡に郷に國とするのあり されば
安藝とよめるは安來の訓を誤るものにて可愛川は安來郷
をながれ經て伯耆の大川といふもの是なり その源出雲の仁多郡
能義郡の堺葛野山より出て川上をいふを川といひ安來を經
伯耆國に入りて日根川といへり 伯耆國にてその川を總て大川と
名づくといへり これまで宣昌説なり 按ずるに出雲風土記に意
宇郡安來郷神須佐乃烏命天避立廻坐之尓時來
坐此處而詔吾御心者安平成詔故云安來也 この文
にて素盞嗚尊の詔にて安來と名づくるよしも神代紀一書の傳
つまも符合するを鳥上二水考證にも古事記傳の須賀宮につく
らべし條にも引いださゞるはいかなるぞや


南
東
北
出雲
大原
仁多
能義
意宇
伯耆大川即可愛之川是也
鳥上山
室原山
三坂山
葛野山
舟上
松江
手間
長江
平田


西
石見
飯石
三瓶山
神門
出雲

おころへいの窟

越後国会津領新発田領入会の山に字をおころへいと云ふ地あり、
文政七年の夏のころ、戸倉村の樵夫七人いざなひて山深く尋
ね入りけるに、往来の道より二十五丁ほど入りて広きところに
て凡そ人数三十人ばかりも住べきほどの窟あり、その窟の深さ
五十間も貫きたりと思ふところに、あひだけ人の六七十人も住むべ
きほどの所あり、いづくより明りのさし入るにや暗からず、それよ
り奥のかたさはいとせばくなりしも、その深さはかりがたし、この所より
奥へ行くべき穴の口に鉄の格子ありて、いかほど押したりとも開く
ことなし、おそろしく相ともなひておそれて立かへりしとかや、
その七人のうち三人は出るとひとしく発熱してやがて死まかり

しとぞ、この一条は過しころ友人柳菴のきたりし折、この類ひの窟
諸国にまゝあることにて、予が曽て聞ところは、常陸国関本郷に
隠里といふ所あり、これも越後のおころへいの窟に似たり、狭隠里と
いふは信濃にもあり、壤蹄といふ地志に見えたり、大井平の洞穴の
図説は八戸の耽奇漫録に載せ、下野都賀郡の洞穴のことは随
掃篇に志るしたれば、ここにはもらしつ、それが中に或は名だたる世の
廟穴の野人の為に穿ちたるもおほかるべし、菅笠日
記に、安倍文殊の岩屋は高さも広さも七尺ばかり、奥へ三丈
四五丈もあらん、これもいにしへいかなる世にたかき人をはふり
し墓とぞいひつたへたり、また陵墓志に、倭姫命の御
墓のあらはれたるを土人此字に隠石窟といふよしも見えたり、

冨士山の高

駿河の冨士山ハ三國にまたがりて吾邦に無比高山なりしが、その高さいくばくといふことをしらざりしが、塵塚物語に、直に立れバ九十六町あり、といひ、月刈藻集に直立して二十五町ともいへり、いづれか正しといふを知らず。ちかきころ享保十二年の夏、福田某といふ人測量せしに、駿河の吉原宿より冨士山の頂まで二百十六町二分一六、二十周四方の盤にてこれをはかる差一寸八分五厘　里數にすれバ六里〇〇六〇〇六となれり、山の高さハ三十五町六分二一六三、両極の高一丈一尺　ふかく高差一尺九寸十分三厘とある筆記に見えたり、これハ近町人の測法なれバ正しき積りなるべし、

翁問答

吾邦にてはじめて陽明王氏の学を唱へ、心法をもつて教をさとしけるハ、中江藤樹なり。近江國の人にてそのころ世人徳を崇めて近江聖人とよびけり、その人物おもひやるべし。撰行状のくはしきことハ年譜あり。藤樹年わかき日くりしより聖人に心ざしあり、弟子行ふべき條理をもとめて釈教を学びしが、その后人倫日用にたよりあらざるを悟りて儒道に入り、遂に一家をなし教へを傳へ、勉めて怠らず、進みをくさまで徳にかなふべきことを忘れしく、老翁の物がたりに記しるせる書に聖經の語意をやはらげ、翁問答といひ、又その書に心学ハ凡夫より聖人に至る道なりとあり。これ等の書にハあれど実に數ひきゝ、心法傳授の書ともいふべし

今心学といふものおこなはるれども心法の学ハはやく道熟しておこなはれしといふべし心学の書くさぐさ多かる中にこの翁問答にまさるものなし

世事百談巻之三